

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 2 4 年 6 月 2 5 日現在

機関番号：3 7 3 0 2

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20320097

研究課題名（和文） 「シーボルトが紹介しようとした日本」の復元的研究

研究課題名（英文） Restored research of “Japan” that Siebold tried to introduce in Europe

研究代表者：

宮坂 正英（MIYASAKA MASAHIDE）

長崎純心大学・人文学部・教授

研究者番号：00269101

研究成果の概要（和文）：

本研究は、ヨーロッパ各地の博物館、大学、図書館ならびに末裔宅に所蔵されるシーボルト関係文書並びにシーボルトが日本滞在中に収集した日本産業・生活文化資料を横断的に調査・研究し、シーボルトがヨーロッパでどのような構想をもとに日本を紹介しようとしたのか、その一端を復元的に研究しようとする試みであった。今回の調査でミュンヘン国立民族学博物館にシーボルトが死の直前まで行っていた日本展示の構成を具体的に示す目録が発見され、これをもとに展示品を抽出した。その結果、シーボルトの日本紹介は従来の美術・工芸を中心とした日本紹介と異なり、日本の産業とその産業に従事する日本人の生活文化の紹介に主眼が置かれていることが分かった。このことから、シーボルトが意図した日本紹介は、独自の発想による異民族およびその文化の理解の方法に基づいて行われていることが分かり、今後シーボルトの民族学的な思想を解明する手がかりを得ることができた。

また、本研究を通じて、ヨーロッパ各地の関係諸機関に分散して所蔵されているシーボルト関係資料を横断的に調査・研究する方法が必要不可欠であることが認識された。このためには、画像付きデジタル・データベースの共有化が最適であるため、最初の試みとして、ミュンヘン国立民族学博物館所蔵のシーボルト・コレクションおよびシーボルトの末裔フォン・ブランデンシュタイン家所蔵のシーボルト関係文書の画像付きデジタル・データベースの構築を開始した。

研究成果の概要（英文）：

This research was based on a wide ranging study of Siebold research papers kept in various museums, universities and libraries all over Europe, and Siebold's own research documents into Japanese industry and family way of life as owned by his living descendents, the von Brandestein family.

Through this research we attempted to reconstruct from what point of view Siebold tried to introduce Japan to Europe. While conducting research at the Munich State Museum of Ethnology, we found a list of the exhibits, structure and composition of an exhibition Siebold held there until just before his death. Based on this, we determined that unlike others who had introduced Japan from the point of view of its arts and crafts, Siebold had emphasized Japanese industries and the lifestyles of those people involved in them. These findings helped us conclude that it was his aim to introduce Japan based on his own original way of thinking, and his own unique understanding of the Japanese as a people.

It was while conducting this research that we recognized that it was essential to connect all of the various materials owned by the aforementioned institutions, and to this end we began construction of the illustrated digital database based on the collections of Siebold materials owned by the Munich State Museum of Ethnology and the von Brandestein family.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2009年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2010年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2011年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
総計	12,900,000	3,870,000	16,770,000

研究分野：史学一般

科研費の分科・細目：基盤研究(B)

キーワード：シーボルト、シーボルト・コレクション、ブランデンシュタイン家文書

1. 研究開始当初の背景

シーボルト研究が本格的に始まって以来およそ100年が経過しているが、文書資料やコレクションがヨーロッパ各地の博物館、図書館、大学などに分散して保管されているため、これらを横断的に研究したものは現在までほとんど存在していない。

また、シーボルトが収集した歴大な日本生活文化資料がオランダ・ライデン国立民族学博物館とドイツ・ミュンヘン国立民族学博物館に所蔵されているが、シーボルトがどのような構想をもとにヨーロッパ各地での展示会を通じて日本を紹介しようと試みたのか、不明のままであった。

また、日本での情報や資料に基づいてシーボルトが作成した日本および北方地域の地図がどのような地理学情報をもとに作成されたのか、その成立過程はほとんど明らかにされてこなかった。シーボルトの手で作成された日本地図ならびに日本周辺の地図は、1853年に来航したペリー提督率いるアメリカ日本遠征隊やプチャーチン提督率いるロシア日本遠征隊によって大いに活用されたり、ロシアの東シベリア植民地政策や極東外交政策に影響を与えたことが知られている。シーボルトの日本地図作成の過程を解明することは、とりもなおさずヨーロッパにおける日本およびその周辺地域の地理学上の認識の変遷を知るうえで重要な課題であるといえる。

シーボルト研究を今後さらに深化、発展させるためには関係諸機関が所蔵する文書資料および器物の情報を結合することが不可欠であり、そのためにはデジタル・データベースによる情報共有が急務であるといえる。

2. 研究の目的

本共同研究は、シーボルトに関する文書資料群としては最大の規模を持つドイツ在住の末裔、フォン・ブランデンシュタイン家の

文書・記録・地図・絵画の調査により抽出された日本研究および日本外交に関する資料とミュンヘン国立民族学博物館、ライデン国立民族学博物館、ライデン大学図書館などに所蔵されているシーボルトの収集品や外交文書を結びつけ、シーボルトの日本研究の概要と日本博物館構想、さらには外交活動の実態を復元的に研究することを目的としている。

具体的な調査・研究のテーマは以下のとおりである。

- シーボルトの日本の産業調査の実態解明
- シーボルトによる日本地図作成過程の解明
- シーボルトの日本博物館の復元的研究
- シーボルトの幕末外交への関与の実態解明

3. 研究の方法

日本の産業調査の解明

シーボルトの日本における調査の中から特に、農業に関しては日本の穀物、手工業に関しては漆器、藍染、鋳業に関しては銅生産に焦点を絞って調査研究をおこなう。穀物に関しては、ブランデンシュタイン家文書群の中に「調査報告第8号、日本の穀物」と題した未刊の完成稿が存在しており、本研究の代表者である宮坂がすでに解読を開始している。また、手工業に関しても漆、藍染に関しては草稿、メモの存在が確認されている。収集品に関しては、ミュンヘン国立民族学博物館に漆の原料、半製品、道具などの収集品が所蔵されており、比較的明確に文書と収集品を連携させることが可能であると考えている。また日本の鋳工業に関しては、シーボルトの助手H・ピュルガー筆の日本の銅の生産と加工に関する報告が存在し、シーボルト自身が1826年に行われた江戸参府に随行した折、大坂で住友の銅の精錬所を見学した記録も残っている。

ブランデンシュタイン家文書資料群中から、シーボルトの日本の農業、手工業、鉱業に関する調査記録、調査報告、収集品に関する記録などを抽出、解読分析し、結果を踏まえて記述に現れる資料の簡易データベース化をおこなう。さらに、これと平行してライデン国立民族学博物館、ミュンヘン国立民族学博物館で所在調査を行い、該当すると考えられる所蔵品を抽出し、調査・研究をおこなう。最終的に文書資料と対応する収集品のデジタル画像をもとに関連データベースを構築するための基礎情報のデータベース化をおこなう。

#### シーボルトによる日本地図作成の過程の解明

ブランデンシュタイン家シーボルト関係資料群より、シーボルトが日本地図作成に使用したと思われる地図類、観測データ、関連する記述などを抽出し、解読並びに分析をおこなう。その後調査結果に基づいて、ライデン大学図書館、ミュンヘン国立民族学博物館等に所蔵されているシーボルト収集の日本地図の調査を行い、シーボルトによる日本地図作成の過程と作成された地図のヨーロッパ地理学に与えた影響などについて考察する。また産業資料調査同様、文書と地図をつなぐデータベース構築のための基礎情報を整備する。

#### シーボルトの日本博物館の復元的研究

シーボルトがどのような構想をもとに日本を紹介しようとしたのかをブランデンシュタイン家文書群に含まれる資料を基に考察し、作成したデータをもとに、まず手始めにミュンヘン国立民族学博物館所蔵の収集品を調査し、ヴェルツブルクに開設された日本博物館の復元を試みる。

#### シーボルトの幕末外交への関与の実態解明

ブランデンシュタイン家文書群よりシーボルトの第二次日本滞在中に行った外交活動を示す資料を抽出し、解読後にデン・ハーグの国立中央公文書館に所蔵されているシーボルトからオランダ政府に提出された公式報告書や東京大学史料編纂所、外交史料館に所蔵されている関連する史料と比較対照する。このことにより、シーボルト自身が経験した外国活動の私的な記録と公式記録を連携させ、幕末期における幕府の外交活動の実態をとり明確化させる。本研究においては、とくに文久元年に横浜で行われた外国奉行松平石見守との会談、同年横浜で起こった東禅寺事件の処理などに関する記録に焦点を当て、調査・研究を行う。

#### 4. 研究成果

に関してはシーボルトの日本産業紹介の代表的な事例として、穀物栽培、特に水稲耕作に焦点を当て、シーボルトの収集品、並びに文書資料を所蔵する機関を横断的に調査した。その結果、ブランデンシュタイン家文書中から「日本の穀物」と題された草稿2点が発見され、またその情報源となるシーボルトの初期の門人美馬順三が提出したオランダ語論文がルール大学ポッフム所蔵の文書史料群“Sieboldiana”から発見された。また、ライデン国立民族学博物館及びミュンヘン国立民族学博物館所蔵のシーボルト・コレクションに穀物標本をはじめ水稲に関する図画、農機具、稲わらを原料とする各種製品など広範かつ体系的な調査が行われていることがわかった。

また、漆器類については、ブランデンシュタイン家文書中に漆にかんする未完の草稿が残されており、これに関連して、ミュンヘン国立民族学博物館所蔵、ならびにブランデンシュタイン家所蔵の漆器コレクションの悉皆調査ならびに撮影を行った。この調査を通じ、コレクションの構成の特徴、ならびにシーボルトの収集の意図、社会的な背景などについてその手がかりを探った。この結果、シーボルトの収集が美術工芸品として価値の高いものに重点が置かれているのではなく、あくまで産業調査の一環として、当時の日本社会に流通していた漆製品の収集にあったことが判明した。このことから、シーボルトのコレクションが、収集された江戸後期に流通していた漆製品の「基準資料」として江戸後期の生活文化史の基礎資料として価値あるものであることが確認できた。

また、シーボルトの日本産業調査の実態解明のため、その所在を知られながらほとんど未調査であったベルリン国立図書館所蔵の「江戸参府日記」原本2冊の調査を実施し、対象資料の高画質撮影を行った。

また、データベース作成については、ブランデンシュタイン家文書を収録したマイクロフィルム27,000コマのデジタル化を行い、これに新たに発見された文書資料の画像を加え、デジタル目録化を開始している。

今回の研究調査により、収集品と文書を関連付けることで、ライデン国立民族学博物館やミュンヘン国立民族学博物館に収蔵されている日本生活文化資料や産業資料がシーボルト自ら構想した日本博物館に展示することを想定して収集されていることが明らかになった。また、シーボルトが展示を通じて紹介しようとしていた日本像は、日本の産業や生産に従事する人々の暮らしに主眼が置かれていたことがわかった。これは同時期に渡来した他の西洋人が収集した日本コレクションと性格が異なるもので、日本の産業

文化をヨーロッパに紹介しようとした稀なコレクションであることが明らかになった。

に関しては、ブランデンシュタイン家に所蔵されている地図類、特に日本地図作成に使用されたと考えられる手書きの地図およびトレース稿の悉皆調査および分類を行い、全資料の高画質撮影を実施した。また、ライデン大学図書館およびミュンヘン国立民族学博物館に所蔵されているシーボルト・コレクション中の日本および北方地域の地図の悉皆調査と撮影も行っている。また、収録された画像データをもとにデジタル・データベースの構築も開始している。

今回の調査により、シーボルトが作成した日本および北方地域の地図にどのような既存の地図が使用されていたかを知るさまざまな手がかりを得ることができた。この基礎調査はとりもなおさず、19世紀前半のヨーロッパにおける日本に関する地理学的な情報がどのような情報源をもとに形成されていたか知る手がかりとなるものとなった。

に関しては、今回の研究調査中に、シーボルトが日本をどのように展示・紹介しようとしていたかを示す文書資料を発見することができたため、シーボルトの日本展示を具体的に再現することが可能になったことが最大の成果であった。

シーボルトがバイエルン王国政府に提出した「日本博物館」構想の建白書を解読し、いかなる構想のもとにヨーロッパで日本を紹介しようとしたのかを解明しつつある。また、ミュンヘン国立民族学博物館に所蔵されている第二回渡来時に収集した日本コレクションの展示構成を知ることができる目録を発見し、翻刻翻訳を行った。この目録はシーボルトが死去した直後に長男アレクサンダー・フォン・シーボルトが父のコレクションをバイエルン王国政府に売却するために、シーボルトの死後ミュンヘンにそのまま残されていた日本展示を展示ケースごとに記録した目録であることが判明した。この調査結果をもとに、実際に収蔵品を並べ、シーボルトの日本展示がどのようなものであったかを明らかにするための試験的な展示の復元を試みることができた。

この結果シーボルトの日本展示は2部門に大別され第一部門は日本の産業紹介、第二部門は日本に関する学術研究資料であることがわかった。第1部では日本の主要な産業である農業、手工業の原料、道具、器具類及び半製品、完成品が体系的に紹介されており、また第2部では宗教、芸術、工芸など日本人の精神活動の結果生み出される様々なモノを体系的に展示されていたことが判明した。このことからシーボルトの構想した「日本博

物館」は従来の異国趣味や芸術的な視点から構想されたものではなく、まったく独自の日本人の生業と生活を紹介することで日本人、および日本の生活文化を紹介するというユニークなものであった。

に関してはブランデンシュタイン家文書中に残されているシーボルトが第二次日本滞在中に幕府要人と交わした書簡を中心に調査、撮影を行った。また、シーボルトの2人の息子たちアレクサンダーとハインリッヒの日本における外交、社会、文化活動に関する史料、特に膨大な数の未解読の書簡が発見されたため、この資料群の調査、撮影も行っている。

今回の調査のなかで発見された外国奉行からシーボルトに渡された書簡類は和文書簡ならびに蘭訳、封書等が完全な形で残されたものがいくつか発見された。国内では和文、ならびに蘭訳分がセットで発見される例はなく、書簡の内容と相まって、幕府要人が外国人とどのような形式で交信を行っていたかを知るうえで貴重な情報を得ることができた。

また、内容的にもシーボルトが幕府の外交顧問として雇用された経緯や江戸滞在中の活動、さらには幕府による解任とその後の日本の対欧州外交への関与を具体的に示す資料が多数発見された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

宮坂正英、ベルント・ノイマン、石川光庸「フォン・ブランデンシュタイン家所蔵、1825年、1828年、1830年シーボルト関係書簡の翻刻ならびに翻訳」、シーボルト記念館『鳴滝紀要』、第18号、平成20年、29-62p.

宮坂正英、ベルント・ノイマン、石川光庸「フォン・ブランデンシュタイン家所蔵、1827年-1829年シーボルト関係書簡の翻刻ならびに翻訳」、シーボルト記念館『鳴滝紀要』、第19号、平成21年、15-54p.

宮坂正英、ベルント・ノイマン、石川光庸「ブランデンシュタイン家所蔵、1825年、1826年、1830年シーボルト関係書簡の翻刻ならびに翻訳(補遺1)」、シーボルト記念館『鳴滝紀要』、第20号、平成22年、29-62p.

宮坂正英、ベルント・ノイマン、石川光庸「ブランデンシュタイン家所蔵、1825年、1828年、1830年シーボルト関係書簡の翻刻なら

びに翻訳(補遺2)」、シーボルト記念館『鳴滝紀要』、第21号、平成23年、65-99p.

宮坂正英「シーボルトの見た江戸」、『歴博』、第171号、国立歴史民俗博物館、2012年3月、16-19頁。

〔学会発表〕(計8件)

1. 宮坂正英「ブランデンシュタイン家文書中のシーボルト関係書簡について」(ドイツ語)、第4回国際シーボルト・コレクション会議、2010年10月6日、ドイツ、ヴュルツブルク市。
2. 久留島浩「」第4回国際シーボルト・コレクション会議、2010年10月6日、ドイツ、ヴュルツブルク市。
3. 宮坂正英「」科研成果報告会「幻の「シーボルト日本博物館を追って」」、2011年12月3日、長崎歴史文化博物館
4. 久留島浩「シーボルト・コレクションの魅力」、科研成果報告会「幻の「シーボルト日本博物館を追って」」、2011年12月3日、長崎歴史文化博物館
5. 青山宏夫「シーボルトと地図資料 ブランデンシュタイン家肖像資料をめぐって」、科研成果報告会「幻の「シーボルト日本博物館を追って」」、2011年12月3日、長崎歴史文化博物館
6. 日高薫「シーボルト・コレクションの漆器について」、科研成果報告会「幻の「シーボルト日本博物館を追って」」、2011年12月3日、長崎歴史文化博物館
7. 松井洋子「蒐集の旅としての江戸参府とそのロジスティクス」、科研成果報告会「幻の「シーボルト日本博物館を追って」」、2011年12月3日、長崎歴史文化博物館
8. 小林淳一「シーボルトの日本展覧会および民族学博物館構想について」、科研成果報告会「幻の「シーボルト日本博物館を追って」」、2011年12月3日、長崎歴史文化博物館

〔図書〕(計1件)

宮坂正英「ブランデンシュタイン家資料に見られる小シーボルトの日本での活動」、J.クライナー編『小シーボルトと日本の考古学の黎明』、同成社、2011年、61-70p.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宮坂 正英 (MIYASAKA MASAHIDE)  
長崎純心大学・人文学部・教授  
研究者番号：00269101

### (2) 研究分担者

久留島 浩 (KURUSHIMA HIROSHI)  
国立歴史民俗博物館・教授  
研究者番号：30161772

青山 宏夫 (AOYAMA HIROO)  
国立歴史民俗博物館・教授  
研究者番号：00167222  
日高 薫 (HIDAKA KAORI)  
国立歴史民俗博物館・教授  
研究者番号：80230944

### (3) 連携研究者

小林 淳一 (KOBAYASHI JUNICHI)  
東京都江戸東京博物館・副館長  
研究者番号：なし  
松井 洋子 (MATSUI YOKO)  
東京大学史料編纂所・教授  
研究者番号：00181686